

研究

小児期および保護者の歯科保健行動と成人期の 定期歯科健診との関連

—成人期の定期歯科健診に関する意識調査—

佐藤 公子

〔論文要旨〕

本研究では、A看護大学2年の学生を対象に小学校から高校までの家庭、学校における歯科保健対策、口腔の健康に関する関心、歯科的要因を含む生活習慣、受診行動に関わる要因を調査した。この結果、「小学校の時、家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた」、「朝食を毎日食べる」は定期歯科健診の有無と関連性が認められた。このことから、定期歯科健診の受診に、小児期から継続して朝食摂取といった基本的生活習慣の維持や学校、家庭に対して定期歯科健診の意義を理解してもらえ、働きかけをすることの重要性が示唆された。

Key words : 定期歯科健診, 意識調査, 受診行動, 生活習慣

I. 緒 言

個々の家庭を取りまく環境は子どもの多様な生活習慣を形成していくと同時に、子どもの口腔の健康、歯科的要因を含む食習慣や保健行動にも反映されやすい^{1,2)}。口腔の健康維持に効果的な役割を果たす定期歯科健診の受診行動も家庭環境と関係性があり、成人の定期的歯科健診受診といった行動に影響を及ぼすことが示されている^{2,3)}。このように、保護者の健康に対する意識や家庭環境は、小児期から成人期にわたる生活習慣の形成と密接なかかわりがあるため、「生涯を通した歯と口腔の健康づくり」にとって保健行動との関連を把握することは重要であると考えられる。

1999年の保健福祉動向調査⁴⁾では、口腔の健康を78.0%の者が注意しており、「食後、歯を磨いたり、口をすすぐようにしている」が最も

多く行われていた行動であった。また、食生活では「バランスの取れた食事を心がけている」、「よくかんで食べるようにしている」を日常生活上注意する点としてあげていた。しかし、「歯科検診や歯科健康診査を受けるようにしている」者は、15.9%にすぎない。定期的に口腔の状態を把握することは、口腔の健康について知識や関心を高め、適正な歯科保健行動を選択する能力を養う有効な手段である^{5,6)}。このため、小児、成人の定期歯科健診の受診行動を支える要因^{7,8)}の検討を行い、受診率の向上に努めているが不明瞭な点が多くみられる。小児期における家庭、学校での口腔管理の実践が成人期における保健行動の基礎となることを考慮すると、生活習慣と成人期の保健行動の関連を把握することは小児期の歯科保健指導を行っていくうえで重要である。

今回、A看護大学2年の学生を対象に小学校

Related to School Children, Their Parents Health Behavior, Regular Dental Check-up in Adult

[2118]

— Survey on the Awareness of Regular Dental Check-up in Adult —

受付 09. 2.18

Kimiko SATO

採用 09. 8.30

県立広島大学（研究職/歯科医師）

別刷請求先：佐藤公子 県立広島大学三原キャンパス 〒723-0053 広島県三原市学園町1-1

Tel : 0848-60-1120(代) Fax : 086-271-6607

から高校までの家庭, 学校における歯科保健対策, 口腔の健康に関する関心, 歯科的な要因を含む生活習慣, 受診行動に関わる要因を調査した。次に, その結果から成人の定期歯科健診受診といった行動と小学校からの家庭環境, 関心, 生活習慣などの要因の関連性を分析し, 小児期における支援の検討を目的とした。

II. 対象および方法

1. 対象

A県下のA看護大学2年生64名(男性9名, 女性55名)を対象として2009年1月に調査を行った。アンケート調査を行うにあたり, 調査目的, 調査に協力しなくても不利益がないこと, 個人情報保護への配慮を口頭および文書で説明した。調査用紙は即日回収とし, 学生が用紙を教室に設置している回収箱に入れることで研究への同意が得られたとみなした(回収率96.9%)。

2. 方法

調査項目は, 表1に示すとおりである。質問紙調査は, 基本情報, 小学校から高校までの家庭, 学校における歯科保健対策, 口腔の健康に対する関心, 歯科的な要因を含む生活習慣, 受診行動に関わる要因の5項目で作成した^{7,8)}。なお, 調査項目は5件法で回答を得た。

定期歯科健診の有無と他の質問の回答との関連を χ^2 検定もしくはMann-Whitney U検定を用いて分析した。先の検定で統計的有意性を示した項目を説明変数, 定期歯科健診受診の有無を目的変数として多重Logistic回帰分析を行った。なお, すべての数値解析には, SPSS 16.0J for Windowsを用いた。

III. 結果

1. 基本情報

回答が得られたA看護大学2年生62名(男性8名, 女性54名)を対象として調査を行った。定期歯科健診を受けている学生は17.7%, 受けていない学生は82.3%であった。性別と歯みがきの関連と口腔内の状態を表2, 3に示した。男女とも歯みがき回数「2回」と回答した学生が78.0%と最も多く, 全学生が毎日1回は歯みが

表1 調査項目

1. 基本情報
 - 性別, 定期歯科健診の有無, 口腔の状態, 歯みがき回数
2. 小学校から高校までの家庭, 学校における歯科保健対策
 - 1) 自分の口腔衛生の習慣は小さいとき, 家族に教えてもらったことが影響していると思う
 - 2) 小学校の時, 家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた
 - 3) 小学校の時, 自分が歯を磨いた後, 家族から仕上げ磨きをしてもらった
 - 4) 小, 中, 高校で歯科保健教育を受けた経験がある
 - 5) 小, 中, 高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っている
3. 口腔の健康に対する関心
 - 1) 歯の健康について関心がある
 - 2) 定期的に歯医者に行くことは健康にとってよいと思う
 - 3) 歯科受診するのは面倒だ
4. 歯科的な要因を含む生活習慣

生活習慣

 - 1) 甘いものは食べないように気をつけている
 - 2) 寝る1時間前には何も食べない
 - 3) 固い食べ物は普段あまり食べない
 - 4) 食事は10~15分で食べ終わる
 - 5) テレビを見たり, 何かをしながら食事する
 - 6) 朝食を毎日食べる

歯科保健行動

 - 1) デンタルフロスを使用している
 - 2) フッ化物配合歯磨剤を使用している
5. 受診行動に関わる要因
 - 1) 歯科の診療日が休日, 祭日だと定期的に行くと思う
 - 2) 歯科の診察終了時間が遅いと定期的に行くと思う

がきをしていた。性別と歯みがき回数, 口腔の状態と歯みがき回数は関連性が認められなかったが, 口腔の状態「歯に物がはさまる」と「歯痛」に弱い関連性が見られた($r=0.281$, $p<0.05$)。

2. 定期歯科健診の有無と歯科保健対策, 関心, 生活習慣, 受診行動に関わる要因との関連

1) 性別

表4に性別と定期歯科健診の受診状態を示した。性別と受診率では, 男性より女性の受診率が高いことが示された($p<0.001$)。

2) 小学校から高校までの家庭, 学校における歯科保健対策

表5に歯科保健対策と健診受診の状況を示した。「口腔衛生の習慣化に家庭教育の影響がある」と回答した学生は38.7%であった。14.5%の学生が「小学校時, 家族から仕上げ磨きをしてもらった」と回答した。「小学校の時, 家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた」, 「小, 中, 高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っ

表3 口腔の状態

自覚症状	計 (%)	ある (%)	時々ある (%)	ほとんどない (%)	ない (%)
歯肉出血	62 (100)	2 (3.2)	17 (27.4)	20 (32.3)	23 (37.1)
歯痛 (1 か月以内)	62 (100)	9 (14.5)	9 (14.5)	8 (12.9)	36 (58.1)
歯に物がはさまる	62 (100)	5 (8.1)	24 (38.7)	14 (22.6)	19 (30.6)
上記の症状をすべて持つもの	8 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (25.0)	6 (75.0)

表2 性別と歯みがきの有無

歯みがき回数	0回	1回	2回	3回	計	U検定
男	0 (0)	2 (25.0)	6 (75.0)	0 (0.0)	8 (100)	NS
女	0 (0)	5 (9.8)	40 (78.4)	6 (11.8)	51 (100)	
計	0 (0)	7 (11.9)	46 (78.0)	6 (10.2)	62 (100)	

NS : Not significant

表4 性別と定期歯科健診の有無

定期歯科健診	計 (%)	あり (%)	なし (%)	χ ² 検定
男	8 (100)	0 (0.0)	8 (100.0)	***
女	54 (100)	11 (20.4)	43 (79.6)	
計	62 (100)	11 (17.7)	51 (82.3)	

*** : p < 0.001

表5 小学校から高校までの家庭、学校における歯科保健対策

項目	定期健診	計 (%)	はい (%)	ある程度 ある (%)	ほとんど ない (%)	ない (%)	U検定
1) 自分の口腔衛生の習慣は小さいとき、家族に教えてもらったことが影響していると思う	あり	11 (100)	5 (45.5)	3 (27.3)	2 (18.2)	1 (9.1)	
	なし	51 (100)	19 (37.3)	21 (41.2)	4 (7.8)	7 (13.7)	
	計	62 (100)	24 (38.7)	24 (38.7)	6 (9.7)	8 (12.9)	
2) 小学校の時、家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた	あり	11 (100)	4 (36.4)	1 (9.1)	4 (36.4)	2 (18.2)	*
	なし	51 (100)	10 (19.6)	8 (15.7)	6 (11.8)	27 (52.9)	
	計	62 (100)	14 (22.6)	9 (14.5)	10 (16.1)	29 (46.8)	
3) 小学校の時、自分が歯を磨いた後、家族から仕上げ磨きをしてもらった	あり	11 (100)	1 (9.1)	4 (36.4)	2 (18.2)	4 (36.4)	
	なし	51 (100)	8 (15.7)	9 (17.6)	12 (23.5)	22 (43.1)	
	計	62 (100)	9 (14.5)	13 (21.0)	14 (22.6)	26 (41.9)	
5) 小、中、高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っている	あり	11 (100)	5 (45.5)	4 (36.4)	0 (0.0)	2 (18.2)	*
	なし	51 (100)	5 (9.8)	9 (17.6)	14 (27.5)	23 (45.1)	
	計	62 (100)	10 (16.1)	13 (21.0)	14 (22.6)	25 (40.3)	
項目			9回以上	5～9回	1～4回	0回、不明	
4) 小、中、高校で歯科保健教育を受けた経験がある	あり	11 (100)	0 (0.0)	3 (27.3)	5 (45.5)	3 (27.3)	
	なし	51 (100)	3 (5.9)	10 (19.6)	25 (49.0)	13 (25.5)	
	計	62 (100)	3 (4.8)	13 (21.0)	30 (48.4)	16 (25.8)	

* : p < 0.05

ている」と感じている学生に定期歯科健診受診者が多かった (p < 0.05)。また、48.4%の学生が小、中、高校で「1～4回」歯科保健教育を受けた経験を持っていた。

3) 口腔の健康に対する関心 (表6)

66.1%の学生が「歯の健康について関心がある」と回答し、83.9%の学生が「定期的に歯医者に行くことは健康にとってよいと思う」と回答していた。しかし、定期歯科健診の有無と関心に関連性は認められなかった。41.9%の学生は「歯科受診するのは面倒だ」と考えており、「歯の健康について関心がある」が「歯科受診する

のは面倒だ」と回答した学生は41.5%、38.5%の学生が「定期的に歯医者に行くことは健康にとってよいと思う」が「歯科受診するのは面倒だ」と回答した。

4) 歯科的な要因を含む生活習慣 (表7)

食習慣では「甘いものは食べないように気をつけている」学生が6.5%、25.8%の学生が「寝る1時間前には何も食べない」と回答したが、定期歯科健診の有無と統計学的有意差は認められなかった。「朝食は毎日食べる」と回答した学生に定期歯科健診を受けたものが多かった (p < 0.01)。歯科保健行動では82.3%の学生が

表6 口腔の健康に対する関心

項目	定期健診	計 (%)	はい (%)	ある程度 ある (%)	ほとんど ない (%)	ない (%)	U検定
1) 歯の健康について関心がある	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	7 (63.6) 34 (66.7) 41 (66.1)	3 (27.3) 9 (17.6) 12 (19.4)	1 (9.1) 5 (9.8) 6 (9.7)	0 (0.0) 3 (5.9) 3 (4.8)	NS
2) 定期的に歯医者に行くことは健康 にとってよいと思う	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	10 (90.9) 42 (82.4) 52 (83.9)	1 (9.1) 6 (11.8) 7 (11.3)	0 (0.0) 1 (2.0) 1 (1.6)	0 (0.0) 2 (3.9) 2 (3.2)	
3) 歯科受診するのは面倒だ	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	4 (36.4) 22 (43.1) 26 (41.9)	6 (54.5) 17 (33.3) 23 (37.1)	1 (9.1) 5 (9.8) 6 (9.7)	0 (0.0) 7 (13.7) 7 (11.3)	

NS : Not significant

表7 歯科的な要因を含む生活習慣

項目	定期健診	計 (%)	はい (%)	ある程度 する (%)	ほとんど ない (%)	いいえ (%)	U検定
生活習慣							
1) 甘いものは食べないように気をつけている	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	1 (9.1) 3 (5.9) 4 (6.5)	1 (9.1) 5 (9.8) 6 (9.7)	1 (9.1) 1 (2.0) 2 (3.2)	8 (72.7) 42 (82.4) 50 (80.6)	
2) 寝る1時間前には何も食べない	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	3 (27.3) 13 (25.5) 16 (25.8)	4 (36.4) 9 (17.6) 13 (21.0)	2 (18.2) 6 (11.8) 8 (12.9)	2 (18.2) 23 (45.1) 25 (40.3)	
3) 固い食べ物は普段あまり食べない	あり なし 計	11 (100) 50 (100) 61 (100)	0 (0.0) 8 (16.0) 8 (13.1)	5 (45.5) 7 (14.0) 12 (19.7)	1 (9.1) 6 (12.0) 7 (11.5)	5 (45.5) 29 (58.0) 34 (55.7)	
4) 食事は10～15分で食べ終わる	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	3 (27.3) 10 (19.6) 13 (21.0)	4 (36.4) 16 (31.4) 20 (32.3)	2 (18.2) 4 (7.8) 6 (9.7)	2 (18.2) 21 (41.2) 23 (37.1)	
5) テレビを見たり、何かをしながら食事する	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	6 (54.5) 30 (58.8) 36 (58.1)	5 (45.5) 17 (33.3) 22 (35.5)	0 (0.0) 0 (0.0) 0 (0.0)	0 (0.0) 4 (7.8) 4 (6.5)	
6) 朝食を毎日食べる	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	10 (90.9) 29 (56.9) 40 (64.5)	1 (9.1) 8 (15.7) 8 (12.9)	0 (0.0) 7 (13.7) 7 (11.3)	0 (0.0) 7 (13.7) 7 (11.3)	**
歯科保健行動							
1) デンタルフロスを使用している	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	10 (90.9) 41 (80.4) 51 (82.3)	0 (0.0) 3 (5.9) 3 (4.8)	0 (0.0) 6 (11.8) 6 (9.7)	1 (9.1) 1 (2.0) 2 (3.2)	
2) フッ化物配合歯磨剤を使用している	あり なし 計	11 (100) 51 (100) 62 (100)	4 (36.4) 11 (21.6) 15 (24.2)	1 (9.1) 3 (5.9) 4 (6.5)	1 (9.1) 1 (2.0) 2 (3.2)	5 (45.5) 36 (70.6) 41 (66.1)	

** : $p < 0.01$

デンタルフロスを使用していると回答したが、意識してフッ化物配合歯磨剤を使用していた学生は24.2%と半数以下であった。

5) 診療時間と受診行動の関係

表8に診療時間と受診行動の関係を示した。「歯科の診療日が休日、祭日だと定期的に行く

と思う」と回答した学生は43.0%、「歯科の診療終了時間が午後7時までだと定期的に行くと思う」が44.0%と最も多かった。「歯科の診療日が休日、祭日」で「歯科の診療終了時間が午後8時まで」だとある程度行くと思うと回答した学生は55.6%であった。しかし、「歯科の診

表 8 診療時間と受診行動の関係

	診療終了時間が遅いと定期的に行くと思う	計 (%)	不明 (%)	午後 7 時まで (%)	午後 8 時まで (%)	午後 9 時まで (%)
歯科の診療日が休日、祭日だと定期的に行くと思う	はい	1 (100)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)
	ある程度行く	27 (100)	1 (3.7)	8 (29.6)	15 (55.6)	3 (11.1)
	ほとんど行かない	16 (100)	2 (12.5)	1 (6.2)	4 (25.0)	9 (56.2)
	いいえ	18 (100)	0 (0.0)	1 (5.6)	2 (11.1)	15 (83.3)
	計 (%)	62 (100)	3 (4.8)	10 (16.1)	22 (35.5)	27 (43.5)

表 9 Logistic 回帰分析による定期歯科健診分析

項 目	χ^2 値	p 値	Odds 比	Odds 比の95%信頼限界	
				上限	下限
小学校の時、家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた	5.87	0.022*	0.14	0.03	0.76
小、中、高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っている	0.37	0.541	1.30	0.56	2.98
朝食を毎日食べる	2.48	0.016*	0.36	0.04	1.30

* : $p < 0.05$

療日が休日、祭日だと定期的に行くと思う」、「歯科の診察終了時間が遅いと定期的に行くと思う」と定期歯科健診の有無には顕著な差が認められなかった。

6) Logistic 回帰分析による定期歯科健診分析

χ^2 検定もしくは Mann-Whitney U 検定を用いて分析した結果、統計的有意性を示した 3 項目を説明変数、定期歯科健診受診の有無を目的変数として多重 Logistic 回帰分析を行った (表 9)。「小、中、高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っている」は定期歯科健診の有無に影響を及ぼしていなかったが、「小学校の時、家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた」、「朝食を毎日食べる」は定期歯科健診と関連性が認められた ($p < 0.05$)。

IV. 考 察

歯周疾患の多くは 20～30 歳代に発症、増悪し、40～50 歳代で歯を失う大きな原因である。定期歯科健診はこのような慢性的な経過をたどる歯科疾患に長期的な口腔の健康維持、管理ができるため効果的であるが、歯科健康診査を受けたことがある者は 17.9% と少なく、健診を受ける意識や習慣が定着していない現状である^{4,9)}。今後の歯科保健対策としては、う蝕、歯周疾患の原因が多要因性の疾患で生活習慣と関連が深いことから、幼児期から生涯を通じた歯の健康を考えていかなければならないことは明らかで

ある^{10,11)}。このため、定期歯科健診を受診することで集団、個別に長期的な予防、管理を行い、成長とともに口腔への健康に意識づけをしていくことが必要であると考ええる。今回、看護大学 2 年の学生を対象に定期歯科健診の有無と小学校から高校までの家庭、学校における歯科疾患対策、口腔の健康に関する関心、歯科的な要因を含む生活習慣、受診行動に関わる要因を調査し、成人期の定期歯科健診の受診に影響を及ぼす要因の検討を行った。成人期の自主的な歯科保健行動につながる要因を把握することは、今後の健康教育や保健指導に役立つと考える。

看護大学 2 年生の口腔管理としては、100% の学生が「1 日 1 回歯みがき」を行っており、保健福祉動向調査報告⁴⁾の 95.4% と比べて高い値を示した。口腔内の状態「歯肉出血」、「歯痛」、「歯に物がはさまる」に関しても「ある」と回答した学生は、15～24 歳の調査報告結果と比してすべて低値であった。しかし、定期歯科健診の受診率は、保健福祉動向調査報告 15～24 歳の受診状況 25.3% と比較すると 17.7% で低い値であった。このことは、当大学において歯科疾患の自覚症状を呈する者が少なく生活に支障をきたしていないこと、歯みがき行動は生活習慣として高い割合で定着しているが定期歯科健診に関する習慣が低いことを示している。性別と定期歯科健診の関係では、笹原ら⁸⁾の報告と同様に女性の受診率が男性より有意に高い値を示し

た。また、女性は、有意差は認められなかったが歯科疾患対策、健康に関する関心、生活習慣、歯科保健行動を男性より高い割合で「行っている」と回答し、健康意識や良好な生活習慣を持っている学生が多かった。このことから、女性の定期歯科健診の受診率には、生活習慣や健康に関する意識が影響していると考えられる^{7,8)}。

次に、小学校から高校までの家庭、学校における歯科保健対策であるが、有意差が認められたのは「小学校の時、家族が歯医者者に定期的に連れて行ってくれた」、「小、中、高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っている」の2項目であった(Mann-Whitney U検定)。この2項目のLogistic回帰分析の結果、「小学校の時、家族が歯医者者に定期的に連れて行ってくれた」が定期歯科健診と関連性を持っていたが、これは定期的に歯科健診に連れて行くなど学童期に口腔の状態に関心が高い環境で育成された場合、成人期においても定期歯科健診を受ける割合が高いことを示していると考えられる。したがって、定期歯科健診を促すためには小児期から学校や家庭に働きかけ、定期歯科健診の意義を理解してもらうことが重要であると考ええる。

学童期は混合歯列期であることから仕上げ磨きの継続はう蝕予防に重要であるが、14.5%の学生が小学校のとき仕上げ磨きを行ってもらっていた。この値は蓑輪ら¹¹⁾の報告とはほぼ同様の結果であった。しかし、混合歯列期にう蝕罹患率が増加傾向にあることから考えても、仕上げ磨きの継続時期について保護者の理解を求め、実施率を高める働きかけが必要であると考ええる。蓑輪らは、小学校低学年を対象とした研究で仕上げ磨きの有無と定期検診の有無間で関連性が認められると述べていたが、本研究では関連性が認められなかった。関連性が認められなかった要因として、小学校低学年の受診は学童に対する家族の保健行動が直接結びついていますが、成人期では本人の健康意識や現在の生活環境の方が家族の保健行動より強く受診行動に影響していると推測される。「自分の口腔衛生の習慣は小さいとき、家族に教えてもらったことが影響していると思う」と回答した学生が38.7%、16.1%が「小、中、高校で歯科保健教育を受けた経験は役立っている」と答えたこと

もこれを示唆しており成人期の生活習慣には現在の住居環境、教育環境が直接的な影響を与えていると推測される^{12,13)}。

生活習慣と健康にかかわる研究では、よい健康習慣を多く持つ人は不健康な生活習慣の人と比べて健康破たんの進行が遅いことが示され、生活習慣は健康と関連性が高いことが知られている¹⁴⁾。今回の調査では、嗜好、咀嚼の面では6.5%の学生が「甘いものを食べないように気をつけている」、37.1%の学生が「食事は10～15分以上かける」といった点を注意しており、保健福祉動向調査報告と比較して高い値であった。しかし、注意している学生は半数に満たず、良好な生活習慣を持っている学生は少ない。Breslow¹⁵⁾らはさまざまな生活習慣の中から「間食はしない」、「朝食を毎日摂る」などの7つの健康習慣が健康度に影響していることを明らかにした。この中の「朝食を毎日食べる」は、健康に望ましい生活習慣の一つであるが、本研究では「朝食欠食率」が11.3%であった。この数値は、平成17年度国民健康栄養調査¹⁶⁾による20歳代の1人世帯の欠食率49.4%と比較しても低値である。定期歯科健診の受診と関連があった項目が「朝食を毎日食べる」であったことを考えると朝食摂取といった基本的な生活習慣は、健康維持に関わる重要な項目であると考ええる。このため、朝食摂取の有無は、健康に対する意識や生活状態を把握する一つの指標になると考える。

定期歯科健診や歯科保健行動を支える動機づけとして「歯の健康に対する関心」は重要であるが、今回の調査では定期歯科健診の有無と明確な関連性が認められなかった。41.9%の学生は「歯科受診するのは面倒だ」と考えていたが、定期歯科健診を受けている学生の3割も同様に感じていた。「診療時間の延長」、「休日、祭日の診療」といった通院のしやすさは定期歯科健診を受けるため大切な条件であるが、受診者からの定期歯科健診の受診率を高める要因としては認められなかったことも受診を促す難しさを示している。しかし、8割の学生が「定期的に歯医者に行くことは健康にとってよいと思う」と考えていたことから、受診の必要性や健診効果の理解があると考えられる。個人の良好な歯

科保健行動と口腔の健康に対する意識は歯科健診受診を促す要因の一つである^{7,8)}。健康維持といった能力を育成するために保健行動の関連要因を明確にしていくことは重要である。今後は、対象者数を増やし、定期歯科健診と口腔の健康に関する関心や家庭、学校における歯科保健対策が成人に与える影響を明らかにして保健教育に活かしていきたい。

V. 結 論

1. 多重 Logistic 回帰分析の結果、定期歯科健診の受診は「小学校の時、家族が歯医者に定期的に連れて行ってくれた」、「朝食を毎日食べる」と関連性が認められた。
2. 定期的に歯科健診に連れて行くなど学童期に口腔の状態に関心が高い環境で育成された場合、成人期においても定期歯科健診を受ける割合が高いことが示唆された。したがって、定期歯科健診を促すためには小児期から学校や家庭に働きかけ、定期歯科健診の意義を理解してもらうことが重要であると考ええる。
3. 朝食摂取といった基本的な生活習慣は、健康維持に関わる重要な項目であるため、朝食摂取の有無は健康に対する意識を把握する一つの指標と考える。

文 献

- 1) 田村光範. 小児科医からみた子どもの生活習慣病. 小児科診療 2000 : 6 : 815-821.
- 2) 笹原妃佐子, 河村 誠, 宮城昌治, 他. 母親の歯科保健行動ならびに口腔内状態と3歳児健康診査受診状況との関連について. 日本公衛誌 1998 : 45 : 1059-1067.
- 3) Lissau I, Holst D, Friis-Hasche E : Use of dental services among Danish youths : role of the social environment, the individual, and the delivery system. Community Dent Oral Epidemiol 1989 : 17 : pp109-116.
- 4) 平成11年保健福祉動向調査. 厚生省大臣官房統計情報部保健社会統計課国民生活基礎調査室. 東京 : 厚生統計協会.
- 5) 森下真行, 藤岡道治. 歯科医院におけるリコールシステムと Professional Tooth Cleaning の効果. 口腔衛生会誌 2004 : 54 : 50-57.
- 6) 筒井昭仁, 福光保之, 何 陽介, 他. ヘルスプロモーションをペーストする成人歯科保健管理プログラムの評価—8年間の成人歯科保健管理プログラムの実践—. 口腔衛生会誌 2003 : 57 : 564-573.
- 7) 石井瑞樹, 末高武彦. 初めて歯科保健事業に参加した成人男性における口腔保健状況の検討—第一報 かかりつけ歯科医の影響について—. 口腔衛生会誌 2007 : 57 : 650-661.
- 8) 笹原妃佐子, 河村 誠, 清水由紀子. 定期歯科健診への受診行動に影響する要因について. 口腔衛生会誌 2004 : 54 : 196-207.
- 9) 三浦佳子, 溝口玲子, 品田佳世子, 他. 定期的な予防管理を受けている人の口腔内状態について. 口腔衛生会誌 2002 : 52 : 474-475.
- 10) 高橋優介, 邵仁 浩, 吉田明弘, 他. 幼児のう蝕発症リスクからみた母子間のう蝕リスク因子の関連性. 口腔衛生会誌 2008 : 58 : 168-176.
- 11) 養輪玲子, 今井敏夫, 田中とも子, 他. 沖縄県における小学校学童の口腔健康状態と基本的な生活習慣との関連性. 小児保健研究 2007 : 34 : 34-45.
- 12) 斎藤昌久, 河野公一, 渡辺美鈴, 他. 医科大学新入生の生活習慣と健康自己評価. 大阪医大誌 2000 : 59 : 8-22.
- 13) 門田新一郎. 学生の健康管理に関する研究 CMI 健康調査と生活行動の関連について. 日本公衛誌 1983 : 30 : 368-379.
- 14) 森本兼義 (編). ライフスタイルと健康 健康理論と実証研究. 東京 : 医学書院, 1995.
- 15) Berkman, I.F., and L. Breslow 森本兼義監訳. 3 健康習慣と死亡率. 生活習慣と健康. 東京 : HBJ 出版局, 1989.
- 16) 健康・栄養情報研究会. 国民栄養の現状 平成17年度厚生労働省国民健康・栄養調査報告より 東京 : 第一出版, 2008.